

1

- 1 a 断然
- b 加工
- c 出張

- d 機会
- e 観光
- f 演出

- 2 A 空
- B 満
- C メ
- D 立
- 3 I イ
- II オ
- III ア

- 4 経済的
- 5 (記述題)
- 6 市販の
- 7 エ

- 8 X 野菜
- Y 豆
- Z 旬
- 9 エ

- 10 豆類の常備
- 11 イ

2

- 1 I 根
- II 責任
- III ア
- 2 イ
- 3 (記述題)

- 4 ウ
- 5 以心伝心
- 6 エ
- 7 プライド
- ド

	[配点]	
その	11	11
他	5	2
	2	3
	3	
各	各	各
4	6	2
点	点	点
×	×	×
16	2	12
64	12	24
点	点	点

1

事	つ	ご
。	か	は
	の	ん
	常	と
	備	み
	食	そ
	だ	汁
	け	と
	の	い
	食	く

(同意可)

2

3 エラーを叱られて泣いていると思われるのが恥ずかしかったから。

(同意可)

「意地とプライドがあるので、泣いていることを他の人に知られたくなかったから。」

①

- 1 いろいろなことばの意味を覚えて正しく書けるようにしよう。
- 2 A・B おながが空⁺いているかどうかである。
C 長所。利点。反対語はデメリット。
D ささいな欠点をうるさくとがめること。
- 3 I おいしくすることは優先していない↓そのため↓おいしくするための添加物はそんなに入っていない。
II 豆類の常備食に種実類を含むこともある↓また↓魚類の常備食に昆虫が入る地域もある。
III ごはんとみそ汁の食事では手軽に匂を味わせる↓ところが↓主食がパンでは一年中似たような食事になってしまう。
- 4 お金がかからない⇨安上がりである⇨経済的である。
- 5 直前の「これ」と同じものを指している。ごはんとみそ汁と常備食のことだが、字数に合うように答えなければならない。
- 6 常備食は一度に多くは食べないので（塩分や）糖分が高くて気にななくてもよいことである。その例として「市販の煮豆」があげられている。
- 7 食べることができるということなので可能の意味である。アは受け身、イは自発、ウは尊敬の意味である。
- 8 X・Y 本文では常備食を四つに分類して紹介している。
Z 直前の「いま」がヒントになっている。
- 9 生命を維持^じするための食事、身体に必要な栄養素をきちんと摂^とるための食事ということである。イでは栄養過多^{かた}のイメージであり、アのように値段のことを述べたものではない。ウについては「しかし、だからといって」のあとでつけ加えている要素なので、この部分の意味には含まれない。
- 10 質の悪さをごまかすところが麻婆豆腐の話に通じる。ケチャップ・辛さ・油などがすべて悪いということではないだろうが、濃い味つけで元の味をわからなくするのに使っているというのである。
- 11 「本文全体」にかかわるものを選ぶ。ごはんをおいしく食べるためにおかずを減らしてみそ汁と常備食だけにするのがよいという話であった。常備食ということばにたづねられてアにとびつかないこと。また、ウを選ぶようではいけない。たまたま最後の段落に出てきただけのものである。同じくエも本文の後半に出てきただけのものである。

②

- 1 I 「根を持つ」は恨^{うら}みに思っ^わつても忘^{わす}れないこと。
II エラーを気にするかどうかという話が、あとの良子のせりふ「エラー一つで泣けるのは、がんばってるからよ。責任感がある証^{あかし} 抛^なよ」につながる。上に「無」が付く三字熟語ということで見当づけることもできた。
III 空らん部は登志雄のせりふであり、良子のとつぜんの変化に驚いている場面である。妻が自分の意見に賛同^{さんどう}するようになったのだからエ「ちがうよ！」はおかしい。かといってウ「そうだよ！」では、次のせりふ「どうしたんだ、お前」に合わない。イ「何が？」はあてはまりそうだが、夫婦ゲンカまでした話題なので、何のことかわからないというのはおかしい。
- 2 「お前」のあとの「も」に着目する。三振してほめる監督への非難^{ひなん}に続けて、三振しておきながらほめられて満足している一番バスターもおかしいと述べている場面である。
- 3 涙を拭^{ぬぐ}っているのに汗をふいているふりをしている。男はやたらに泣くもんじゃないと思っ^わっているのである。直後の「男・意地・プライド」といったことばを並べただけでは、ナオがなぜ涙をごまかすのかわからない。
- 4 「不適當なもの」を答える問題である。良子が「ガキのくせに格好よかった」と感じた場面である。自分たちのミスを恥じて、ともに奮起しようとしているのである。ウではナオだけがミスしたことになってしまう。
- 5 「以心伝心」は、だまっ^たまっ^たでも心が通じあうこと。とつぜんのことに「少し驚いた」ナオだったが、「すぐさま『よしっ』と声を出^でして返球したところからタツヤの意図を理解したことがうかがえる。また、ナオのしぐさや態度^{たいど}から、自分の意図がナオに通じたこととタツヤにわかったのである。
- 6 「不適當なもの」を答える問題である。エ「勝利へのこだわり」はナオとタツヤのものであり、その二人のようすを見た登志雄夫婦が「格好いい」と感じたものである。「適當なもの」は、気持ちが変わる前の良子や何人かの母親たちの発言からわかる。「子どもらしさ」が大事だと考えているのだからア「明るさ」やイ「むじやきさ」を求めていることはわかりやすい。ウ「あきらめない心」は十^じ点差をあきらめないことをよしとしているところからわかる。
- 7 この場合の「美学」は、美についての感覚でなく、どういうものをよしとするかという価値観^{かちかん}のようなものである。まだ幼^{おきな}い子どもたちだが、大人の知らないところで自分たちなりに「格好いい・格好悪い」という基準^{きんじゅん}を持っている。試合のようすやコマースヤルの内容と重ね合わせて考えていく。言い訳^{いわけ}や泣き^なきことを言^いわないで努力^{どりょく}し結果を残していくようすを格好いいとし、カタチだけ張^はり切^きっているようなのは格好悪いのである。プライドは誇^{ほこ}り、自尊^{じそん}心^{しん}のことである。